

各学校には、教育目標があるが、「学校の教育目標」ではなく、「学校教育の目標」になっていないか注意したい。学校の教育目標は、自校の課題を達成させるために設定されたものであり、全国の学校にそのままあてはまるような教育目標は再考したい。どこの学校にもあてはまるよくある教育目標は、どちらかと言えば、教育の目的に近いものであり、学校教育の目標になっていると考えられる。その学校の教育のめざす方向は分かるが、教育の目的に近いものであるため、目標と現状とのギャップが大きすぎて、目標達成のための取組の絞り込みも難しくなり、検証・評価がどうしても曖昧になってくる。

改めて、自校の教育目標の表記や内容をみてもらいたい。目標と教育活動のつながりが明確でなければ、教育目標と現状のギャップを埋めるために、一元化した目標に設定し直してほしい。

目標と言われるものは、そもそもめざすものではなく、達成するものである。小学校では生活目標と称して、例えば「トイレの下足を揃える。」という目標に対して、できたか、できなかったかを帰りの会で達成度を確認していた。このように目標には、達成度を確認できることが前提になりそうである。

以前、勤めた学校の教育目標「かしこく やさしく たくましく」は、どこの学校にもあてはまるもので、教育目標というよりは、教育の目的に近い。本市の学校の教育目標もその傾向はないだろうか。今一度、目的と目標を明確に区別する必要がある。繰り返すが、「教育の目的」に近い表現にすると、どうしても現状とギャップが大きいため、取組の絞り込みや具現化が難しくなり、検証・評価も曖昧になっていく。そればかりか、その教育目標の下に重点目標と称して、5つも6つもの具体目標を作ることになってしまう。

学校の教育目標は、評価が可能な具体性を有すること(※)が重要である。達成度がある程度分かる学校の教育目標にしていかないと、学校評価の公表に耐えられなくなるのも事実である。達成度を意識することを重視すれば、校長が考えるものとするのは過去の考えである。教職員とともに作っていくことが肝要であろう。(芝)

(※) 平成20年8月小学校学習指導要領解説総則編 小学校P76・77, 中学校P78・79